法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-07

生活の改変と環境の利用

北田，宏藏

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
4
(開始ページ / Start Page)
2
(終了ページ / End Page)
2
(発行年 / Year)
1956-05-01

生活の改変と環境の利用

北田宏藏

たださえ狭い国土を敗戦によつて狭められ、しかも海外の市場を奪われまたは著しく局限されたわが国民は、従来の生活様式をほとんど一変するまでに変更するのでなければ、現在の永続的危機を脱することはできそうにもない。国際情勢の複雑な地図に依存して絶えず不安なその日、その日を過ごすことを別とすればあらゆる角度から見て国内のあらゆる資源を最高度に利用するとともに、生活様式そのものをこれに順応するように合理的に改変するのが、現在のわが国に残されているほとんど唯一の道であろう。

わが国で古くから作り上げられた文化はいわゆる米作文化であり、国民のすべての生活は米食と米作を中心としてこれに密接に結びつきながらすべての面でこれから遠く離れることなく営まれてきた。およそ水田に利用できる土地は労力の報償さえ無視して細大余すところなく開拓されて、急な斜面にも階段状水田が見られるようになつている。これに比べると畑は二次的で、広大な関東台地などの開拓は比較的近世のことに属し、さらにその著しい発展を見るようになつたのは、西洋文化の影響を受けて国民の生活がかなり変化されてから後のことである。牧畜に至つてはさらに歴史が新しく、食生活と関連を持つ豚や、牛の飼育が始められてから僅か数十年にしかならず、その現状は欧米諸国から見れば物の数にも入らない。

わが国における牧畜の不振は国民の食生活に原因があるのであつて、自然環境の問題は二の次ぎである。山地国たるわが国にはまだ全く手付かずに残されている高山牧草地が相当にある。確かに、わが国の高山牧草地にはささやすげが生茂つてそのまゝ牧畜に適しない所が多いが、牧場に対する欲求が増大すればこれを有利に解決することは必ずしも不可能ではあるまい。要は米を偏食する食生活の改変にある。

これは単なる一例に過ぎないが、国民の生活様式を適当に改変することを前提として、土地利用を考えるならば、その効果は期してまつべきものがあることを、筆者は信じて疑わない。生活様式を実際改変するには政治家の手を借りねばならないであろうが、その前にわれわれ地理学者は、まず種々の前提のもとに環境の最も適切な利用を比較研究して、国家の難局の打開に寄与するのが第一の仕事ではなかろうか。